

なにわ・大阪文化遺産学研究センター と文化遺産学

櫻木 潤



私からは、「なにわ・大阪文化遺産学研究センターと文化遺産学」をテーマにご報告させていただきます。その後、特別任用研究員の内田から、なにわ・大阪文化遺産学研究センターがこれまで大きな柱としてまいりました地域連携、先ほども東北文化研究センターが地域とのつながりということでお話しいただきましたけれども、私どものセンターも地域連携ということの一つ大きな柱としておりますので、そのお話をさせていただきたいと思います。

まず、センターは、その名前にありますように、「文化遺産学」という、新しい学問体系を構築することを目指して、設立されました。

では一体、文化遺産学とは何なのかということですが、これは高橋センター長が関西大学 120 周年記念行事のシンポジウムの基調講演で述べておられることなのですが、何が文化遺産なのかということを探ることがまず第一であると。第二に、その探索した文化遺産というものの研究の方途、どのように調査や研究を進めるのかという、その研究の方途を構想し、それを進めていくということ。第三に、その文化遺産としたものをただ単に大学の中の研究者が調査や研究をして終わりということではなくて、その成果というものを地元の人たちに還元する。あるいは地元だけではなくて広く社会に還元するというのが文化遺産学であると定義されておられます。

まず、1 番目が大事でして、何が文化遺産なの

かということを探るということです。その文化遺産とは何かという問題に対しては、大きく言えば国宝とか重要文化財、あるいはユネスコが登録している世界遺産といった、だれもが知っているものを取り上げるだけではなくて、地域の歴史に根差してきたいわゆる“Living Heritage”、生きた遺産というものを発掘し、それに光を当てることが「文化遺産学」においては大切なのだと思います。そのためには、地域の文化遺産というものを発掘したり、それを生きた遺産として地域の中で活用している方がたと交流をしていくことも文化遺産の探索にとってはカギとなります。

一方で、地域の文化遺産にその地域の人たちが気づいていないような場合、地域の人が住んでいるその近くに、文化遺産があるということを気づいていただくということは、文化遺産学の使命といえるでしょう。したがって、「地域が何を文化遺産としているのか」という視点を常に持つておく必要があるのではないかと思います。

これまでそのような考えのもとで行ってきたなかで、代表的なものを挙げますと、まず 1 年目に取り組んだ藤井寺市の道明寺天満宮の総合調査がございます。その総合調査では、単に古文書の調査だけではなくて、境内の樹木や石造物、あるいは社殿に置かれている什器といったものまで含めて調査をしました。

また、初年度から進めておりまして、今年度中に報告書を作成し、2009 年 5 月に史料館としてオープンされる予定である、八尾市の旧安中新田会所跡の植田家総合調査があります。これも文献調査だけではなくて、植田家が持っておられた陶磁器だとか、あるいはいわゆる民具というようなものも含めた形で“まるごと”調査をしました。

それから、今年度・来年度の計画が始まっておりますが、大阪市平野区の杭全神社でも総合調査を進めて、その総合調査を通じた地域との連携を深めています。総合調査をした成果については、地域の人々に還元するという意味で、地域連携企画というものを初年度から年に 1 回開催しております。そういった形で、地域の人たちに広くその成果を公開して、地元の文化遺産というものを知っていただいております。有名な文化遺産だけではなくて、自分たちの足元にもすばらしいもの

があるんだということに気づいてもらうきっかけにしています。

先ほどから、道明寺天満宮や杭全神社といった名前が挙がっていますように、センターとしては、文化の集積地である大阪の神社や寺院に注目し、それらをフィールドにしていまいりました。

そこで、神社や寺院を中心に、何が文化遺産であるのかを考える上での手がかりとして、センターでは4つの研究プロジェクトを設置しております。その4つとは、祭礼遺産研究プロジェクト、生活文化遺産研究プロジェクト、学芸遺産研究プロジェクト、歴史資料遺産研究プロジェクトです。

それぞれの主な活動といたしましては、祭礼遺産研究プロジェクトでは、大阪の夏祭り調査を初年度から続けてまいりまして、6月30日の愛染祭から、7月30日から8月1日にかけて行なわれる住吉大社の住吉祭までの大阪府内のお祭りを調査し、それをカレンダーふうに一目でわかるような形で「夏祭りカレンダー」としてその成果を皆さんに頒布しています。あるいは肥後和男氏が調査された『神社を中心とする村落生活調査報告』の翻刻というようなことを行なっております。

生活文化遺産研究プロジェクトに関しましては、大阪の食文化や伝統技術というものに焦点を当てて進めております。大阪の食文化として、現在取り組んでおりますのは、なにわの伝統野菜の復活やその調査・研究です。また、実際にこれをセンターでも栽培し、肌で体験しています。伝統技術については、中世の河内鑄物師^{いもじ}以来の系統を引く大阪錫器^{すずき}や、角谷征一^{かくたにせいいち}先生の工房における鑄物の製作過程の記録などを行なっております。

それから、学芸遺産研究プロジェクトでは、関西大学図書館所蔵の「鬼洞文庫一枚摺」^{きどう}や、センターが所蔵しております『長島侯増山雪齋独樂園賀詞帖』^{ながしまこうましやまぜっさいどくらくえんがしちよう}といった資料を通して、近世大坂の学芸に焦点を当てた研究を行なっています。また、大坂代官であった竹垣直道^{たけがきなおみち}の日記の翻刻も進めています。

歴史資料遺産研究プロジェクトでは、『大日本金石史』を編纂した木崎愛吉^{きざきあいきち}が旧蔵していました「本山コレクション」の金石文拓本資料の調査・研究が挙げられます。しかも、拓本だけを見るのではなく、現地に実際出かけて、今、金石文の状

況がどのようなになっているのかということを含めた調査を進めております。

そのような方法でこの4年間進めているわけですが、文化遺産学の3番目となる成果の公開ということで、ざっと申しますと、研究行事としましては、明日(10月18日)行なわれます、「水がむすぶ文化遺産～最上川と淀川～」のような文化遺産学フォーラムや、レクチャーシリーズ、地域連携企画、ワークショップでして、これらは主に関西大学の学生を対象としていますが、実際に大阪の文化遺産というものを体験してもらうという機会をつくっております。

出版物という形での研究成果の公開といたしましては、毎年の『年次報告書』。それから、各研究プロジェクトの成果にもとづく『なにわ・大阪文化遺産学叢書』がありまして、現在8巻を数えております。研究行事の報告書的な役割を果たしてくれているのが『NOCHS Occasional Paper』です。あと、センターの情報や活動を知っていただくために、ニューズレター『難波潟』^{なにわがた}を年間3号発行しております。現在No. 9まで出ております。それから、センターの活動を速報的にメールでお知らせする「NOCHS MAIL」を月2回ほど配信しております。現在第46号の配信です。

以上述べましたように、新しい学問体系である「文化遺産学」の模索と調査・研究、その成果の公開ということ活動を活動の中心として4年間取り組んできたところです。

櫻木 潤 (さくらぎ じゅん)

センターP.D. (ポスト・ドクトラルフェロー)。専門は日本古代史。論文に、「嵯峨・淳和朝の「御霊」慰撫—『性霊集』伊予親王追善願文を中心に」(『仏教史学研究』47-2、2005年)、「平安時代初期の得度・受戒制度—空海の「出家入唐」をめぐる二種の太政官符を中心に」(『ヒストリア』208、2008年)などがある。